

Title	万葉集における霍公鳥の歌
Sub Title	Cuckoo song in Manyoshu
Author	土田, 将雄(Tsuchida, Masao)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1965
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.20, (1965. 11) ,p.10- 23
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00200001-0010

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

万葉集における霍公鳥の歌

土 田 将 雄

万葉集の歌の中には、自然物として動物、植物が詠みこまれているものが多く、万葉人の生活が今日と比べて、はるかに自然と密着していたことがうかがえるのであるが、このことからかれらが季節の推移に対する敏感さを同時にもっていたといってもよいと思う。けれどもこの季節の推移が季節感としてはっきり意識されるためには、生活の中に、その一部分として組み入れられたものでなければならぬ。つまり季節感とは自然が推移することだけで与えられるのではなく、曆と結びついて年中行事をおってゆく生活の中に、折目として考えられる時に、始めてきわだったものとなることのできるものである。したがって歌の上にも、季節の推移に伴って、その趣が変化してゆくことが認められるが、それと同時に生活の中で、行事をおってゆくことと密接に関係づけられ、それによって歌の創作の契機も生じ、またその歌をよむものに共感の場を与えることにもなっているのである。今ほととぎすを詠みこんだ歌を材料として万葉作者が季節の推移を歌の上にかにあらわしているかを検討し、そこに生活の折目となっている行事、或は風習といったものがからまって、生活意識としての季節感となっていることを指摘してみたいと思う。⁽¹⁾

ほととぎすという言葉をそのまま歌の中に詠みこんだものを、万葉集総索引によって数えたと百五十三首にのぼり、次に多い雁の歌

約六十首、鶯の歌約五十首をはるかにうわまわっている。また歌の中にその言葉がでてこなくてもほととぎすの歌とみなすべきものを、このほかに若干加えることができる。⁽²⁾そこでこれらを加えてほととぎすの歌の各巻における配分を調べると次のようになっている。

卷二⁽³⁾、卷三⁽¹⁾、卷六⁽¹⁾、卷八^(三三)、卷九^(二)、卷十^(三四)、卷十二^(一)、卷十四^(一)、卷十五^(七)、卷十七^(二)、⁽⁴⁾卷十八^(二二)、卷十九^(二六)、卷二十^(五)

今この各巻への配分から家持の歌日記とでもいうべき卷十七、十八、十九、二十に総数の半分以上が集まっていることに着目し、これらは作歌の日附が明らかなので、これをまず手がかりとして、ほととぎすの歌がどういう時に、どういう行事に関連して詠まれたかを検討してみることにしよう。

家持の歌日記のなかのほととぎすの歌で、日附の最も早いのは三月廿日であるが、同日のものは天平十九年(三九七八)、天平勝宝二年(四一六六、四一六八)、同八年(四四六三、四四六四)と三年にわたっている。

三九七八 妹も吾も 心は同じ 副へれど いや懐しく 相見れば 常初花に 情ぐし 眼ぐしもなしに 愛しけやし …… 霍公
鳥 来鳴かむ月に いつしかも 早くなりなむ 卯の花の にはへる山を 外のみも ぶり放け見つつ⁽⁵⁾ ……

詠霍公鳥并時花一首 井短歌

四一六六 時ごとに いやめづらしく 八千種に 草木花咲き 喧く鳥の 音もかはらふ 耳に聞き 眼に視るごとに うち嘆き
萎えうらぶれ 惚ひつつ あらそふ間に 木の晩闇 四月し立てば 夜ごもりに 鳴く霍公鳥 古昔ゆ 語り継ぎつる 鶯の う
つし真子かも 菖蒲 花橋を 嬢子らが 珠貫くまでに ……

四一六八 毎年に来喧くものゆゑ霍公鳥聞けばしのはく逢はぬ日を多み

右、廿日、雖末及時依興預作也

四四六三 霍公鳥まづ鳴く朝明いかにせばわが門過ぎし語り継ぐまで

四四六四 霍公鳥かけつつ君が松蔭に紐解き放くる月近づきぬ

右、五首⁽⁶⁾ 廿日、大伴宿称家持依興作之

これらの年の三月廿日は、いずれも立夏の前で、特に天平勝宝二年の歌の左註には「雖未及時」とあって、これを裏書している。このほか、三月中に詠まれた歌は当然立夏前後になるわけであるが、こうした歌には必ずといってよいほどほととぎすが詠みこまれている。立夏にほととぎすが来て鳴くということは、暦の折目をもととした生活のなかで、その季節の到来を知らせるものとして考えられるものであり、もしほととぎすが鳴かなければ、季節の異変として何か不安な状態におちいるのである。例えば、前掲の三九七八の歌に続く天平十九年三月廿九日の歌に

立夏四月、既経累月 而由未聞霍公鳥喧 因作恨謫二首

三九八三 あしひきの山も近きを霍公鳥月立つまでにて何か来鳴かぬ

三九八四 玉に貫く花橘をともしみしこのわが里に來鳴かずあるらし

霍公鳥者 立夏之日來鳴必定 又越中風土 希有橙橘也 因此 大伴宿祢家持 感発於懷 聊裁此歌 三月廿九日

とあり、この年の立夏四月節は三月廿三日頃と推定されるので、「既経累日」ということは三月廿九日附の作歌として相応しており、この年は暦の上で早く三月中に立夏がきたのに、ほととぎすがなかなか鳴かなかつたのを恨んでいることが理解されるのである。

また翌天平二十年の立夏四月節は四月にあったが、その前の三月廿三日より廿六日にわたって、ほととぎすの歌が八首ある。

四〇三五 霍公鳥厭ふ時なし菖蒲草鬘にきむ日此ゆ鳴き渡れ

四〇四二 藤浪の咲き行く見れば霍公鳥鳴くべき時に近づきにけり

四〇四三 明日の日の布勢の浦廻の藤浪に蓋し來鳴かず散らしてむかも 一は頭に云ふ
ほととぎす

四〇五〇 めづらしき君が来まさば鳴けと言ひし山霍公鳥何か來鳴かぬ

四〇五一 多胡の埜木の暗茂に霍公鳥來鳴き響めばはだ恋ひめやも

四〇五二 霍公鳥今鳴かずして明日越えむ山に鳴くとも験あらめやも

四〇五三 木の暗になりぬるものを霍公鳥何か來鳴かぬ君に逢へる時

四〇五四 霍公鳥此よ鳴き渡れ燈火を月夜に比へその影を見む

四〇三五の歌は特に立夏の前を示すような趣をもつ言葉を有しない。かえって「あやめ草かづらにきむ日」の如き五月の節句に因んだ言葉を使っている。この歌は卷十の一九五五の歌と全く同じで、武田氏は全註釈で「福麻呂が家持の館で吟誦したということには、似あわしくない歌として不審がある。カヅラニ著ム日此ユ鳴キワタレということ、主人ならともかく、旅人としての心にあわない。卷の十にある歌で、古詠に属する」とされている。確かにこの歌は「こゆ鳴き渡れ」という言葉以外にこの場に相応するものをもたないといふべきであろう。しかし他の七首は藤の花が咲き、立夏を旬日にひかえた宴会の歌であることを明らかにしている。このような立夏——ほととぎす——友——宴会といった関係は翌天平二十一年四月一日の歌にもあらわれている。

四月一日、掾久米朝臣広繩之館宴歌四首

四〇六六 卯の花の咲く月立ちぬ霍公鳥来鳴き響めよ含みたりとも

四〇六七 二上の山にこもれる霍公鳥今も鳴かぬか君に聞かせむ

四〇六八 居り明しも今宵は飲まむ霍公鳥明けむあしたは鳴き渡らむぞ 二日応立夏節故謂之明日將喧也

四〇六九 明日よりは継ぎて聞えむ霍公鳥一夜のからに恋ひ渡るかも

四〇四二、四〇四三の歌では、卯の花より先に咲く藤の花によって立夏の前の景物が示されたが、四〇六六では卯の花の咲く月が立つ、すなわち立夏とほととぎすとが巧みに歌の中に組み合わされており、そうした前夜に友と一しよに飲みあかす古代人の姿が髣髴としているのである。天平勝宝二年三月の

廿四日、応立夏四月節也 因此廿三日之暮 忽思霍公鳥晬喧声作歌二首

四一七一 常人も起きつつ聞ぞ霍公鳥この晬に来鳴く初声

四一七二 霍公鳥来鳴き響まば草取らむ花橘を屋戸には植ゑずて

という歌も、立夏の日の晬にほととぎすの初声を聞くことを思い、また来て鳴いた時にすべきことを詠みあわしたのであろう。それは立夏を折目として動いている生活の中で、ほととぎすはその季節の到来を知らせるものとして考えられ、また季節どおりに鳴くことによつて安定した生活を期待しえたことを示すのである。

次に立夏も過ぎ、四月も半ばに入つて詠まれた歌を覚えてみると三十六首あげることが出来る。これらのなかには四月の歌としては少し異例であるが、ほととぎすがまだ来て鳴いていないということを詠むものと、時期に相応してほととぎすが既に来て鳴いていることを基調にしたものがある。しかし前者は或は日附が明らかでなかつたり(四一九四、四一九五、四一九六)、或は手紙をくれないということをはととぎすの鳴かない状態に托している歌であつて、(四二〇七—四二一〇)、ほととぎすの鳴く季節に相応して詠まれているかどうかという問題から一応はずして考えることができる。そこでとりあげるべきものは後者のほととぎすが既に来て鳴いている歌であり、これは自然で無理がないわけである。このような立夏の日のすぐあとに詠まれたものとしては次の数首を代表的なものとしてあげる事ができる。

四〇八四 晝に名告り鳴くなる霍公鳥いやめづらしく思ほゆるかも

四一七五 霍公鳥今来鳴き始む菖蒲磯くまでに離るる日あらめや

四二七六 わが門ゆ鳴き過ぎ渡る霍公鳥いや懐しく聞けど飽き足らず

四一八〇 春過ぎて 夏来向へば あしひきの 山よび響め さ夜中に 鳴く霍公鳥 初声を 聞けばなつかし 菖蒲 花橋を 貫

き交へ 磯くまでに 里響め 喧き渡れども なほししのはゆ

四一八一 さ夜ふけて晝月に影見えて喧く霍公聞けばなつかし

四一八二 霍公鳥聞けども飽かず網取りに獲りてなつけない難れず鳴くがね

四一八三 霍公鳥飼ひ通せらば今年経て来向ふ夏はまつ喧きなむを

立夏になって十日も待たされたためであろうか、来年は待たされないようにほととぎすを飼つておこうという趣向である。遊戯的な点がないではないが、十日も待たされた気持は汲取ることが出来る。

さてこのようにして待ったほととぎすも四月もたけなわになって不断に聞かれるようになった時、どのような生活行事とあわせ詠まれるのであろうか。それは次の歌にみる事が出来る。

三九一〇 珠に貫く棟を宅に植ゑたらば山霍公鳥離れず来むかも

三九一一 霍公鳥何の心ぞ橋の珠貫く月し来鳴きとよむる

三九一二 霍公鳥棟の枝に行きて居ば花は散らむな珠と見るまで

四一八九 天さかる 夷としあれば 彼所此間も 同じ心ぞ 家離り 年の経ぬれば うつせみは 物念繁し そ故に 情なぐさ

に 霍公鳥 喧く初声を 橋の 珠に合へ貫き 獲きて 遊ばむ間も 丈夫を 伴へ立ちて 叔羅河 なづさひ浜り 平瀬には

小網さし渡し 早き瀬に 水鳥を落けつつ 月に日に 然し遊ばね 愛しきわが夫子

すなわち、ほととぎすの鳴く声を橋の珠とともにあえぬいて賞美することが述べられ、橋や棟の珠を貫くこととほととぎすとが詠みあわされているのである。そこで珠に貫くという行事が問題になるのであるが、その前に三九一二の歌にある「橋の珠貫く月」について考えてみよう。

角川文庫版の武田氏校註の万葉集の脚註に「橋の花を珠にして緒に貫く月。四月。橋の花の初めて咲く月の意」とあり、また同氏の全註釈では「橋の花を玉として緒につらぬく月。五月」と改められている。日本古典文学大系の万葉集では(大意)に「橋の花を珠として緒に貫く四月」とある。四月か五月かという問題は万葉集古義において既に疑問となっており、三九〇九、三九一〇、三九一一、三九一二の歌はそれぞれ四月二日、三日ではなくて五月二日、三日の誤りではないかと述べている。その理由として「棟の花は四月の末つかたより、五月かけて咲ものなるうへ、珠爾奴久と云るは、五月五日の薬玉に貫ことなり、しかるを四月二日とよめるよし記せるはいぶかしきことなり。……玉貫月と云るは……玉に貫は、主とは五月五日の事なれど、すべて五月を、ひろく玉貫月と云りし趣、集中を見わたしてしられたり、しかればいよいよ四月三日は、五月三日ならでは理叶ひがたきに似たり」といっている。

私案によれば、これはやはり四月であろう。卷十七の初めの部分是一年分として記載された歌の数が少く、しかも年次もとびとびである。それ故四月二日、四月三日とのみ記してある場合、その年は不明というべきかもしれないが、もし三九〇八の歌の左註の年次に十三年二月とあるのに続いていることから同年の四月と考えてみると、この年には閏の月があり、立夏は閏三月の半ば頃になる。そうすると四月の初めといってもよほど夏めいていると考えられる。したがってこの場合「珠に貫く月」の珠に貫くは五月の薬玉ではな

く、橘や棟の花を使って四月にもつくられる籬の如きものではないだろうか。「わが夫子は玉にもがもな手に纏きて見つつ行かむを置きて往かば惜し」(三九九〇)、「……沖つ波 寄せ来る玉藻 片よりに 籬に作り 妹がため 手に纏きもちて ……」(三九九三)、「わが屋戸の花橘を花ごめに玉にぞあが貫く待たば苦しみ」(三九九八)といずれも四月中に詠まれたもので、四月にも何か珠に貫くという行事をしたのでなければ考えられないのである。天平十九年四月三十日の家持の歌に

四〇〇六 …… そこ念へば 心し痛し 霍公鳥 声にあへ貫く 玉にもが 手に纏き持ちて 朝夕に 見つつ行かむを 置きて行かば惜し

四〇〇七 わが夫子は玉にもがもな霍公鳥声にあへ貫き手に纏きて行かむ
というのがあるが、これもこうした行事を背景にしていることはいうまでもない。そしてこれにほととぎすが景物としてそえられているのである。

さて次にほととぎすという言葉を用いている歌で、五月につくられたのは

天平十九年五月二日の一首(四〇〇八)

天平二十一年五月十日の四首(四〇八九、四〇九〇、四〇九一、四〇九二)

同年五月十四日の一首(四一〇二)

同年閏五月二十三日の一首(四一一一)

同じく二十七日の二首(四一一六、四一一九)

の九首である。これは三月の二十首、四月の三十六首と比べるといちじるしく少ないといわなければならないし、しかもほととぎすが主題になっている歌はごくわずかである。すなわち次の歌があげられよう。

独居唄裏 逢聞霍公鳴喧作歌一首 井短調

四〇八九 高御座 天の日嗣と 天皇の 神の命の 聞し食す 国のまほらに 山をしも さはに多みと 百鳥の 来居て鳴く声

春されば 聞の愛しも いづれをか 別きてしのはむ 卯の花の 咲く月立てば めづらしく 鳴く霍公鳥 菖蒲草 珠貫くまで
に 晝暮らし 夜渡し聞けど 聞くごとに 心つごきて うち嘆き あはれの鳥と 言はぬ時なし

四〇九〇 行方なくあり渡るとも霍公鳥鳴きし渡らばかくやしのはむ

四〇九一 卯の花の共にし鳴けば霍公鳥いやめづらしも名告り鳴くなへ

四〇九二 霍公鳥いとねたけくは橘の花散る時に来鳴響むる

しかしこれらの歌も作歌当時のほととぎすに対する感興というより、卯の花が咲いて月が立つ時、すなわち四月の頃より、菖蒲草を珠にぬく五月の節句、そして橘の花が散る時までのほととぎすを回想風に詠んでいるのであり、長歌に「めづらしく 鳴く霍公鳥 …… 聞くことに 心つごきて うち嘆き あはれの鳥と 言はぬ時なし」、短歌に「かくやしのはむ」、「いやめづらしも名告り鳴くなへ」、或はまた「霍公鳥いとねたけくは」などとあつて、遠くでほととぎすの鳴く声を聞きながら、もはやその時も終つたという心をただよわせつつ、一月余りの事を思い出風に詠んでいるのである。また閏五月二十七日に詠まれた歌

聞霍公鳥喧作歌一首

四一一九 いにしへよしのびにければ霍公鳥鳴く声聞きて恋しきものを

を考えると、ここではほととぎすの鳴く声を聞いて、懐旧の情に堪えぬ思いが述べられており、相聞の歌ではあるが、現実の恋というより、はるかに過ぎ去つた恋の思い出が語られているのである。

総じて五月につくられたほととぎすの歌に共通することは、懐旧の情が溢れてはいるが、感興が類型的になり、ほととぎすに季節の花、季節の行事が慣用句的に詠みあわされているのにすぎないことである。例えば「ほととぎす来鳴くさつきあやめ草珠貫くまでに ……」（四〇八九、四二〇一、四二一一、四二一六）といった形に固定してきているのである。そしてこの理由は、おそらくほととぎすの詠まれる季節が終りに近づいたということによるのであろうか。かつて立夏の頃、ほととぎすを待ち望んだあの明るい調子は失われて、何か暗い感じのするほととぎすになってきているのである。今このことを更に次の資料によって考えてみることにしたい。

今までの考察はほととぎすの歌のなかで、卷十七、十八、十九、二十にある日附の明らかかなものを取りあつかい、これらの歌の趣が月日のすすむにつれて次第に変わってくることであった。これらのなかには勿論例外として時期を無視して、ほととぎすを観念化、類型化して詠まれているものもあったが、一般的には実際の季節からずれておらず、ずれていたとしても多かれ少なかれこれに基づいていることが見受けられたのである。そこで次に卷八、十を始めとして各巻に散在する歌について、その詠まれた時期及び生活との関連を考察してみよう。これらの歌は日附もなく、作者名を殆ど明らかにしていないが、立夏の頃に詠まれたと思われるものもあり、また特に詠みあわされている季節の花、すなわち藤、卯の花、橘などから作歌の時期を推定して配列し、その趣を察することができるのである。

まず立夏の頃に詠まれたか、或は少なくともほととぎすを待つ思いを、うちにこめたものとして

一四六六 神名火の磐瀬の社の霍公鳥毛無の岡に何時か来鳴かむ

一四七〇 もののふの石瀬の社の霍公鳥今しも鳴きぬ山の常陰に

一四九〇 霍公鳥待てど来鳴かず菖蒲草玉に貫く日をいまだ遠みか

一九四〇 朝霞たなびく野辺にあしひきの山霍公鳥いつか来鳴かむ

をあげることができる。一四七〇の歌の第四句の原文は「今毛鳴奴」で、旧訓は「イマモナカヌカ」とよんでいる。いずれにしても期待の心をあらわしているといえよう。また一四九〇の歌は「菖蒲草玉に貫く日を未だ遠みか」と五月の節句をさしているが、作歌の時期を一月位前の立夏の頃にしても問題はなからう。例えば次の歌

一九三九 霍公鳥汝が初声は吾にもが五月の珠に交へて貫かむ

一四六五 霍公鳥いたくな鳴きそ汝が声を五月の珠にあへ貫くまでに

にみられるように、ほととぎすの初声が聞かれる頃から、五月を志向することは、歌の一つの趣向であったのである。

次に立夏の候につづく季節の花とあわせ詠まれたほととぎすの歌を探してみると、先ず藤の花とでは

一九四四 藤浪の散らまく惜しみ霍光鳥今城の岡を鳴きて越ゆなり

一九九一 霍公鳥来鳴きとよもす岡辺なる藤浪見には君は来じとや

をあげることが出来る。藤の花はほととぎすの季節にやや先立っているらしく、日附のある巻のなかにもその趣のある歌が見出だされるのである。たとえば巻十七、十八に次の歌がある。

三九九三 藤浪は 咲きて散りにき 卯の花は 今ぞ盛と あしびきの 山にも野にも 霍公鳥 鳴きし響めば うち靡く 心もし
のに そこをしも うら恋しみと 思ふどち ……

四〇四二 藤浪の 咲き行く見れば 霍公鳥 鳴くべき時に 近づきに けり

四〇四三 明日の日の 布勢の 浦廻の 藤浪に 蓋し来 鳴かず散らしてむかも 一は頭に云ふ
ほととぎす

四一九二 …… かそけき野辺に はるばるに 喧く霍公鳥 立ち潜くと 羽触に散らす 藤浪の 花なつかしみ 引き攀ちて 袖
に 扱入れつ 染まば染むとも

四一九三 霍公鳥 鳴く羽触にも 散りにけり 盛過ぐらし 藤浪の花

次に藤の花におくれて咲く卯の花は、ほととぎすの来て鳴く時よりも更にまたおそいように思われる。そのいくつかをあげると

一四七七 卯の花もいまだ 咲かねば 霍公鳥 佐保の 山辺に 来鳴きとよもす

一九四二 霍公鳥 鳴く声聞けや 卯の花の 咲き散る岡に 田草引く娘子

一九四三 月夜よみ 鳴く霍公鳥 見まく 欲りわれ 草取れり 見む人もがも

一九五三 五月山卯の花 月夜 霍公鳥 聞けども 飽かずまた 鳴かぬかも

一九六三 かくばかり 雨の降らくに 霍公鳥 卯の花 山になほ か鳴くらむ

一九七六 卯の花の 咲き散る岡 ゆ 霍公鳥 鳴きて さ渡る公は 聞きつや

一九七七 聞きつやと 君が問はせる 霍公鳥 しののに 濡れて 此ゆ 鳴き渡る

などが代表的であろう。ただこれらの歌には田の雑草をとっていることや、「五月山卯の花月夜」、或は「しののに濡れて」という言葉が使われていて、五月に入ってからのものであろう。そのほか卯の花の散る趣を詠んだ歌（一四八二、一四九二、一九五七）には、ほととぎすは必ず詠みこまれており、両者の密接な関係がうかがわれるのである。

藤の花、卯の花と続いてほととぎすに縁の深いのは橘である。そして橘とほととぎすとを詠みあわせた歌は、大い生活行事としての橘の珠にぬくこと、及びその花の散ることをとりあげている。

四二三 つのさはふ 磐余の道を 朝さらず 行きけむ人の 念ひつつ 通ひけまはくは 霍公鳥 鳴く五月には 菖蒲 花橘を 玉に貫き 纏にせむと ……

の歌を初めとして、卷十八からも四一〇一、四一〇二、四一六六、四一八〇などの歌をひろいあげることができる。次に引用する長歌は、橘を玉に貫く、ほととぎす、そして橘の散るといった事柄がすべて詠みこまれていて、行事をふまえた季節感が色こくでているといえよう。

一五〇七 いかといかと あるわが屋前に 百枝刺し 生ふる橘 玉に貫く 五月を近み あえぬがに 花咲きにけり 朝にけりいで見ること 氣の緒に わが念ふ妹に まそ鏡 清き月夜に ただ一目 見せむまでには 散りこすな ゆめといひつつ こだくも わが守るものを 慨きや 醜霍公鳥 暁の うら悲しきに 追へど追へど なほも来鳴きて 徒に 地に散らせば 術を無み 攀ちて手折りつ 見ませ吾妹子

一五〇九 妹が見て後も鳴かなむ霍公鳥花橘を地に散らしつ

この歌は花橘を珠に貫こうとしているのに、憎いほととぎすが来て花を散らしてしまうといった趣向である。勿論ほととぎすが花を散らしたわけではなく、花橘の落花の時期と、ほととぎすとの取り合わせは、初めから一つの季節感として与えられているのである。しかしここで注目すべきは、ほととぎすの歌のなかで初めて相聞的な要素がはっきりと見えてきていることである。それは特に次の歌に示されている。

一四七三 橘の花散る里の霍公鳥片恋しつ 鳴く日しぞ多き

すなわちここで前に述べた暗いほととぎすの問題が、ほととぎすの季節では最後の花である橘の散ることと関連して登場してくるのである。はっきりいえば、藤の花も、卯の花も、そして橘も散ってしまったからのほととぎすの歌は相聞の歌としてとりあげることができるのである。以下暗い感じのするほととぎすと相聞の歌ということで述べてみることにしよう。

日附のない卷々にあるほととぎすの歌で、花と組みあわされていないものが多く、したがってまたこれらは今まで取扱った立夏の頃から、五月の節句までの季節とは若干異った季節を示しているように思われる。そこでこれらの歌の詠まれた時期を考察してみよう。

まず卷十五の中臣宅守が狭野弟上娘子とかわした一群の歌のなかにあるほととぎすの歌をとりあげてみる。

三七五四 過所無しに関飛び越ゆる霍公鳥まねくわが子にも止まず通はむ

三七八〇 恋ひ死なば恋ひも死ねとや霍公鳥物思ふ時に来鳴きとよむる

三七八一 旅にして物思ふ時に霍公鳥もとな鳴きそ吾が恋まさる

三七八二 雨ごもり物思ふ時に霍公鳥わが住む里に來鳴きとよもす

三七八三 旅にして妹に恋ふれば霍公鳥わが住む里に此よ鳴き渡る

三七八四 心なき鳥にぞありける霍公鳥物思ふ時に鳴くべきものか

三七八五 霍公鳥間しまし置け汝が鳴けば吾が思ふころいたも術なし

これらのうち、三七五四の歌を除いて、他はすべて最後に集められており、同じ時に詠まれたのであろうが、その時を歌のなかの語句から推定すると、ほととぎすが既に「來鳴きとよむる」「來鳴きとよもす」「鳴きわたる」時であり、更にこれらの歌と並んで記されている「わが宿の花橘はいたづらに散りか過ぐらむ見る人無しに」(三七七九)という歌を借りて、花橘が散りすぎる時、すなわち五月に入ってからということができよう。しかし更に精しく三七八二の歌を考えて、ながめ忌の時であり、五月も節句を過ぎて梅雨期に入り、田植を始める前の特別の物忌の時をさしていると思われるのである。

この物忌については古今圖書集成、仲夏部に五月事忌として「問礼俗云五月俗称惡月按月令仲夏陰陽交生死之分君子節嗜慾勿声色」、端午部には「経日五月初五戒夫婦容止勿居湿地以招邪炁勿臥星月之下」などとあって、中国にもその習慣があるが、わが国の古俗にも同じことがあり、相聞の歌が詠まれる季節的な理由となっていたと考えられるのである。そしてこの場合のほととぎすの歌は今までのはなやいだ季節のものとは異って、むしろ暗い気持をあらわすものとなっているのである。

一四七六 独居ても念ふ夕に霍公鳥此間ゆ鳴き渡る心しあるらし

一四八四 霍公鳥いたくな鳴きそ独居て寐の宿らえぬに聞けば苦しも

一四九八 暇無み来ざりし君に霍公鳥わがかく恋ふと行きて告げこそ

一九八〇 五月山花橋に霍公鳥隠らふ時に逢へる公かも

一九八一 霍公鳥来鳴く五月の短夜も独し宿れば明しかねつも

いずれも独り寝の淋しさを詠んでいるのであるが、その苦しさ、辛さをあらわすためにほととぎすが効果的に詠みこまれているのである。そしてこうしたほととぎすは、かつては来て鳴くのを待たれたのに、今はその苦しい鳴き声で身がたまされる思いをもって聞かれることになるのである。

一四六七 霍公鳥無かる国にも行きてしかその鳴く声を聞けば苦しも

一四六九 あしひきの山霍公鳥汝が鳴けば家なる妹し常に思はゆ

一四七五 何しかもここだく恋ふる霍公鳥鳴く声聞けば恋こそ益れ

一九四六 木高くはかって木植ゑじ霍公鳥来鳴きとよめて恋ひ益らしむ

このようにして人々は苦しい恋をほととぎすの鳴く声に托し、またそれを聞いてそぞろに恋心をかきたてられたのである。

厳しい物忌の生活は、万葉人にとって決して単なる迷信ではなく、むしろ農耕生活に直接関係ある社会的現実であり、この農耕生活にほととぎすもまた密接な関係を持っていたのである。時代は下るが、古今集巻十九の「いくばくの田をつくればか郭公しでのたをさをあさなあさなよぶ」という藤原敏行朝臣の歌によってもそれは理解される。そしてこのような時期にもし物忌を守らなければ、他の人々によって指弾されたかも知れない。それ故、この時に鳴くほととぎすの声によせて、相聞の歌をつくるということも、禁欲の生活からおこる自然の感情のあらわれからである。ほととぎすに寄せる相聞の歌も、ただ作歌上の技巧ではなく、当時の生活を反映した、切実な季節感をただよわせているものとしてみることができるのである。

以上万葉集中のほととぎすの歌を、日附のあるもの、日附のないものにわけて考察し、いずれもその季節の進行によって、暦、年中

行事、習俗と密接に関係して、歌が詠まれていることを見出し、特にほととぎすに感ぜられる明暗の趣の変化をも問題にしてみた。そして季節感というものは、ただ自然の季節による推移だけでなく、これら生活の中の行事、風俗に密着し、そこに基盤をおいているものであるということが看取されたと思う。

註1 ほととぎすに関しては、東光治氏の「万葉動物考」、三谷栄一氏の「日本文学の民俗学的研究」の中に詳細な論考がみうけられる。

2 例えは一一一、三九八四。

3 一一一を含む。

4 三九八四を含む。

5 引用の歌は角川版の武田氏の訓にしたがう。

6 元暦校本に五とあり、仙覚本では二とある。

7 国書刊行会版万葉集古義六、四百四十五頁以下。